

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026年(令和8年)
7月5日 第758号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2026年3月22日～4月5日開催 女性の読書会 講座参加者の感想〉

ゆずきあさこ ^{バター} 著『BUTTER』を読む 一文学作品から考える女性の生き方一

適量なんて、わからない

^{せま} 瀬間 陽子

「私は亡き父親から女は誰に対しても寛容であれ、と学んできました。それでも、どうしても、許せないものが二つだけある。フェミニストとマーガリンです」

こんなセリフを登場人物に言わせる小説家・柚木麻子さんは、まぎれもないフェミニストだ。わたしは田嶋陽子氏の特集を柚木麻子さんが編集した記事を読んだことがきっかけで、柚木麻子さんを知った。『BUTTER』も当然、フェミニスト小説だと捉えて読んだ。そして鼻息荒く、この読書会に臨んだのだ。

今回の参加者は15名の女性たち。第1回目は、講師の山岸郁子先生に促され、各自が気になったフレーズや語りたいテーマを書いていった。ホワイトボード一面に、びらびら貼られたカラフルな付箋が圧巻だった。そして何より、皆さんが書いた内容の、多岐にわたること！ 身体表現、人物の関係性、ルッキズム、料理、食べ物、仕事、家事、妊娠。作中に登場する「ちびくろ・さんぼ」、そして「バター」。それぞれの関心、疑問や問題意識は、それぞれの女性たちの生活や思いと地続きで、その人が心に抱いているものだ。ホワイトボードのびらびらの付箋を見ながら、「フェミニズム」と安易にひと括りにしていた自分が秘かに恥ずかしくなった。

冒頭の台詞をのたまう梶井真奈子（カジマナ）は、2009年に起きた連続不審死事件の被告人女性がモデルとされる。確かに事件をモチーフとしているが、柚木麻子さんの主眼は主人公・里佳と、里佳の親友である伶子の抱える苦悩と奮闘だ。彼女たちの関係はシスターフッドなんて晴れやかなものじゃない。あっけにとられたり、思わず嫌悪感も覚えるような、暴走ぶりや執着を見せる。小説だから、読者をおもしろがらせ、読ませる仕掛けも当然あるのだろう。でも女って、人には見せないおぞましさを、実は誰もが持っているのではないか。

柚木麻子さんは、とことん女たちの独白を書く。例えばカジマナは、こう言う。

「そう、現代の日本女性が心の底から異性に愛されるには『死体になる』のがいいのかもしれない。そういう女を望む彼らだって、とくに死んでいるようなものなんだから」。傷ついた挙句、転んでできた里佳のかさぶた。「血もバターもすぐに固まる。だから、大丈夫だ」。

物語の終盤で、里佳は自分でローンを組んで買った家で、客にふるまうために七面鳥を焼く。その経験から得た実感は、「ああ、そうか。料理を任された女にとって、いざとなれば、人を殺すことなんて簡単なのだ」。どうだろう、女の、この生臭さ。料理の場面を読みながら、「広い意味では、料理の材料はすべて死体だな」と、考えてしまった。最後に里佳は「この世界は生きるに、いや、食欲に味わうに値しますよ」とカジマナに呼びかける。生きるに値する、と言いかけて、食欲に味わうと言いつつ。わたし自身は、ポジティブであつぱれな宣言だと思つたけれど、このラストは疑問だという意見もあつておもしろかった。

フェミニストとマーガリン。柚木麻子さんは、全部オツケーだよね、と言いたいのだと思う。女は寛容であれ、なんてくそくらえだ、と。何度も何度も「適量がわからない」と苦しむ主人公たち。彼女たちに対して、関係性も役割も、いつだって変わるし、変わつていい。柔らかで、強くて、豊かでおかしい、こんなものもあるよ、と差し出しているのが「バター」なのではないか。

読書会の第3回目は、高級でおいしいバターの話でも盛り上がった。里佳も伶子も、やっぱり「適量はわからない」まま、生き続けていくのだろう。参加者の皆さんも、もしかしたらまだ、妙に胃がもたれているのではないだろうか。

柚木麻子『BUTTER』（新潮社）

ブッククラブから

芥川龍之介著

『藪の中』を読んで — 芥川の自死への考察

横井 みどり

「自分は南部修太郎と一人の女を自分自身では全くその事を知らずに共有してゐた。それを恥ぢて死ぬ。」

瀧井孝作の回想 小穴隆一宛遺書

講師の山岸郁子先生が示してくださった資料の中にこの文章を見つけた時、もつれた紐がするするほどけていくような快感があった。これが『藪の中』が生まれるに至った、芥川の心の中に落とされた種やもしれぬという思いにとらわれたのだ。

『藪の中』には、考えてみれば、シンプルな男二人、女一人の三角関係があった。もちろんそれは日常的に生まれたそれではなく、若い夫婦が旅の途中で多襄丸という賊に襲われる、という非日常においての三角関係であるが、作中には、多襄丸の話をすっかり心を許して聞いている女の様子や、夫に「あの時程、美しい妻は見た事がない」と言わしめる女（おそらくは性的に）高揚した様子が描かれており、そこに夫が激しく嫉妬する。

芥川が現実には彷徨い込んだ三角関係を、この『藪の中』に落とし込んだとすると、さながら妻を奪われた夫が芥川自身ということになるのか。そして夫は目の

前で妻を奪われた恥の為に死ぬ。もちろん、妻の体を奪われたということよりは、心を奪われた恥である。夫の語る、死にゆく際の思いとして、「なんと云う静かさだろう」というくだりがある。ここには、何とも言えない芥川の死への憧憬が述べられている。芥川の自死の原因は、ただ「ぼんやりとした不安」としか語られていないが、小穴隆一宛遺書の文章を読むかぎりでは、現実の三角関係が芥川の死への憧憬をふくらませていったのは間違いないだろう。

賊でありながら権力への批判を論理的に述べ、極刑をも厭わない潔い多襄丸は、ひよつとすると芥川の理想の男かもしれない。そうすると、妻に裏切られる夫は芥川の現実ということになるのか。

しかし気になるのは芥川の女の描き方である。肝心なところにくると二度も気を失い、最後には「わたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？」と途方に暮れる女は、利那利那に生きるだけの主体性のない、そのくせ化物のような魔性を秘めており、恐ろしいばかりだ。女をこのようにしか描けない芥川のもっとの精神性を思うと悲しくなる。夏目漱石が『それから』の三千代に描いた花瓶の水を飲んでしまうような突き抜けたリアリティは、芥川の描く



女性には感じない。『河童』の中でも、雌の河童が雄の河童を追いかけ回して終いには雄の河童は死んでしまふというエピソードが語られていたが、ここにもやはり芥川の女性への恐怖心が語られている。芥川が妻と三人の子どもを遺して亡くなった理由は「藪の中」である。なぜ、その道を選んだのか。芥川は「何か」に溺め取られ、限らない死への憧憬の中に沈んでいったといえるだけである。

くにたちブッククラブ

—なぜ、その道を選んだのか—

朝比奈秋『植物少女』

(朝日文庫)

講師 尾崎 名津子
(立教大学・日本近現代文学)

とき 7月9日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込



* 次回は9月17日(木)
野上弥生子『真知子』
(ちくま文庫) です。

新着図書から

〈歴史〉

炎上で世論はつくられる 山口真一 (筑摩書房)
本づくりで世の中を転がす 木瀬貴吉 (集英社) 023 007

〈歴史〉

ナチ・ハンター正義・真実・記憶

ベアテ・クラルスフェルト (ミネルヴァ書房) 234

ロココ・キッチン

川内有緒 (講談社) 291

三步あるけば、旅の空

平川克美 (灯光舎) 291

アジア・トイレ紀行

山田七絵編著 (白水社) 292

〈社会科学〉

「あなたが嫌う非行少年」に、ワタシがしたこと。

岡田行雄 (現代人文社) 327

多様性とどう向き合うか

岩渕功一 (岩波書店) 361

外国人労働政策

濱口桂一郎 (中央公論新社) 366

世界の社会福祉年鑑

宇佐見耕一 (旬報社) 369

被ばく「封じ込め」の正体

小山美砂 (岩波書店) 369

被爆者が眠る島

永井均 (岩波書店) 369

図解でわかる災害福祉

山本克彦 (中央法規出版) 369

経済力も幸福度も高くなるデンマークのすごい教育

ニールセン北村朋子 (青春出版社) 372

多文化保育のエスノグラフィー 長江侑紀 (明石書店) 376

神さまや鬼とのふしぎな話 小澤俊夫 (岩波書店) 388

〈自然科学〉

馬のこころ

瀧本彩加 (岩波書店) 489

感情労働の未来

恩蔵絢子 (河出書房新社) 498

〈産業〉

植物哲学

川原伸晃 (講談社) 620

〈芸術〉

ペリリユー 楽園のゲルニカ 1〜11

武田一義 (白泉社) 726

映画で知る韓国

アフリカから来たランナーたち

〈言語〉

言語学者、生成AIを危ぶむ 川原繁人 (朝日新聞出版) 801

〈文学〉

イオラと地上に散らばる光

安壇美緒 (角川書店) 91あ

アフター・ユー

一穂ミチ (文藝春秋) 91い

今できることを「今」楽しむ

太田啓子 (星湖舎) 91お

遠慮深いうたた寝 続

小川洋子 (河出書房新社) 91お

煌めくポリフォニー

温又柔 (岩波書店) 91お

踊り場に立ち尽くす君と日比谷で陽に焼かれる君

金原ひとみ (朝日新聞出版) 91か

豊臣家の包丁人

木下昌輝 (文藝春秋) 91き

もうしばらくは早歩き

くどうれいん (新潮社) 91く

白露

今野敏 (幻冬舎) 91こ

エビクロスの処方箋

夏川草介 (水鈴社) 91な

家族

葉真中顯 (文藝春秋) 91は

暁星

湊かなえ (双葉社) 91み

小説集熊

宮沢賢治 (あけび書房) 91み

しつぽのカルテ

村山由佳 (集英社) 91む

百年の短歌

三枝昂之 (新潮社) 91さ

ひとりでの世に

谷川俊太郎 (新潮社) 91た

赤く染まる木々パースヴァル・エヴェレット

(早川書房) 93エ

誰にも見えない子どもアンドレア・エリオット

(亜紀書房) 93エ

わたしたちの図書館旅団

ジャネット・スケスリン・チャールズ (東京創元社) 93ち

シックレット・オブ・シックレッツ 上・下

ダン・ブラウン (KADOKAWA) 93ブ

高校のカフカ、一九五九

ステイブ・ミルハウザー (白水社) 93ミ

図書室のつどい

『いじめられっ子だった弁護士が教える』

自分の身のまもり方

お話 菅野 朋子 (弁護士)

もしいじめを受けたら、どう対応すればよいのでしょうか？ SNSの普及により、いじめの潜在化や多様化が問題視される中、「学校に行くのがつらい」「誰に相談していいかわからない」と悩まれる方も少なくありません。

著者の菅野さんは、学校でいじめを受けた経験を持ち、現在は弁護士として学校問題やいじめ事件に関わる一方、小中学校での法教育やいじめ授業の活動を積極的に行っています。

今回は、菅野さんのご経験と弁護士としての知識をもとに、いじめに立ち向かい、自分の身を守るための法的知識と具体的解決方法をお話いただきます。夏休み期間の開催です。いじめに悩んでいる方、人間関係でモヤモヤを感じている方、いじめ対策を知っておきたい方など、ぜひご参加ください。

〈菅野さんの本〉 表題作 (草思社)

とき 8月16日(日) 朝10時〜12時

ところ 公民館地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 7月15日(水)朝9時〜

電話または申込フォームより

☎042(572)5141





「もう一つのふるさと」 — 移民・難民と生きるドイツの今 —

詳細は公民館だより6月号をご覧ください。/

■と き 7月10日（金）夜7時～9時

■お 話 國本 隆史（映画監督）

講座参考図書

- * 仮放免の子どもたち「日本人ファースト」の標的……………池尾伸一（講談社）
- * やさしい日本語—多文化共生社会へ……………庵功雄（岩波書店）
- * 生きとし生けるもの 入管ウォッチャー15年の面会報告……………西山誠子（風媒社）
- * ひとりもとりこばさない学校へ 部落、貧困、障害、外国ルーツの若者の語りから 志水宏吉（岩波書店）
- * ニッポンの移民—増え続ける外国人とどう向き合うか……………是川夕（筑摩書房）
- * 外国人労働政策 霞が関の権限争いと日本型雇用慣行が招いた混迷の30年史……………濱口桂一郎（中央公論新社）

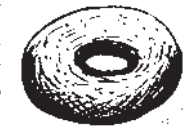
私の本棚から 第4回

黒柳 桂子 著

『めざせ！ムシヨラン三ツ星』

— 刑務所栄養士、今日も受刑者と

クサクないメシ作ります



★「ムシヨラン」とは、
刑務所とレストランの評価で有名なミシュランを合わせて著者が命名したものだ。

高遠 敬子

「刑務所のご飯って、きつとまずいんだろなあ」そう思っていたある時、近くの府中刑務所のお祭りで、ムシヨ飯ならぬ「ムシヨ弁当」（チキンカツに麦飯、漬け物）が売られていたので即購入。一口食べたら美味しくてすぐ完食。これは、きつと本物より美味しくて特別メニューなんだと思っていました。しかし、この『ムシヨラン三ツ星』を読んで私のイメージは一変しました。限られた予算の中で、栄養と美味しさを考える栄養士の著者と調理をする服役中の男子達。みんながワンチームとなって作り出す刑務所の食事。え？ 服役中の男子が作るの？ 包丁を持つよね？ 凶器だよ？ それ、めっちゃ怖いんじゃないの？

そうなんです。黒柳さんも、大男に凶器で狙われたら?! と最初は心配して、立つ位置まで気にしていました。しかし、炊場（チヤガイモ）の現場を炊事工場と言う、その略に配属されるメンバーは、刑務所の中でもエリート中のエリート！ トップガン!? が揃うのです。ただ、料理は初心者。

「先生、みょうがは、どこまでむくんですか？」
おーい、みょうがをむいたら、なくなるよー。

ジャガイモの芽とりを知らない彼ら、ピーラーでどこまでもむいてしまったり、コロッケを爆発させたりと事件が次々と起こるのです。そして、家庭と刑務所の大きな違いは、「平等であるか、どうか」少しでも差が出たら、刑務所では大変なことになります。例えば、ご飯。ご飯の量は、作業量によって量がABCと分かれ、さらに身長によって増量かそのままか年齢によっても量が決まります。

常に刑務所のルールに沿って平等を保つことが大切なのですが、時にはこんなことも。「厚焼きたまご」が切られていないまま納品され、これを人数分に切らなくてはならないハメに。不公平にならないように切るのは責任が重く、誰も切りたがらない。少しでも大きさが違っていたら、仁義なき戦いが!? もちろん、刑務所内では、おかわりも無し。余った分を他の人にあげるのも無し。これらはトラブルへとつながりやすいからです。それだけ、食事は彼らにとつて最大の楽しみなのです。また、服役生活が長くなると、ほとんどの人が甘党でなくても、甘い物が欲しくなるようになるとのこと。刑務所内にはスイーツ男子が多いらしく、時々実施されるアンケートにも細かな要望や提案が。そこで低予算の限界に挑戦!! おからをたっぷり入れて、きな粉でまぶした「獄旨ドーナツ」。これが大人気!!! 炊場で上手に揚げた男子を褒めると、すかさず「俺のことをミスタードーナツと呼んでくれ」と小さな声で教務官にバレないようにジョークをとばす彼ら。知恵を絞る、工夫を重ねるとここまで美味しい物が生まれるのかと、主婦の私も本当、勉強になりました。ちなみに本の中にはレシピもあるのでオススメです。

さてさて、そんな彼らもここを卒業する時がやって来ます。黒柳さんは心から卒業しても、もう戻ってこないでねと願います。『ムシヨラン三ツ星』この本には、黒柳さんのこうした人や料理に対する愛がふれています。料理は、単に食べ物を作る作業ではなく、人と人の心をつなぐ大切なもの。刑務所という特殊な場所であっても、美味しい料理を提供したいという黒柳さんの想いが人を育てていくのだと実感しました。ちなみに『ムシヨラン三ツ星』は5月からNHKでドラマ化されて大評判となりました。追記：2024年、公民館の「図書室のつどい」で、黒柳さんが実際に刑務所内で起きた数々の話をユーモアたっぷりに話されたのが忘れられません。皆様、「図書室のつどい」も本当、オススメです。

（朝日新聞出版）